先行する時間的損失がリスク志向性に与える要因の検討

野上　菜津実

時間という与えられた資源に対して、人間はいかに意思決定を行うのだろうか。本論文では、Leclerc, Schmidt, & Dubé（1995）、頭師（2018）の先行研究にならい、時間を損失した際にその後の意思決定に影響を与える要因について検討した。本論文では Leclerc et al.（1995）にて検討された時間的意思決定における「ブレーク・イーブン効果」を追試的に再現した。ブレーク・イーブン効果とは、Thaler & Johnson（1990）によって提唱された、主に金銭的意思決定に用いられる理論であり、損失を取り戻せる場合に限りリスクのある選択肢を選択する、という人間の心理特性である。本論文では、リスク、すなわち不確実性のある選択肢を選ぶことを「リスク志向」、確実な選択肢を選ぶことを「リスク回避」とし、質問紙法を用いて、様々なシナリオ内でその選択比率が変動する際に影響を与える要因について検討を行った。

実験 1 では、時間的領域における意思決定の判断の基準点となる「予定」の重要度を操作した。調査対象者は A 大学の大学生および大学院生計 47 名であった。回答者を重要度の高い予定を明記したシナリオ（重要度高群）、重要度の低い予定を明記したシナリオ（重要度低群）に二分し、各群のリスク志向・リスク回避の選択比率の差異を検討した。予定の重要度の高低を設定するにあたり、予備調査を行い、大学生にとってなじみ深い予定を選定して、シナリオに用いた。また、意思決定に影響を与えうる個人特性を検討するために、「衝動性尺度」を用いた。分析の結果、重要度別の群において、シナリオ内でのリスク志向・リスク回避の選択率に関して有意差は見られなかった。また、選択肢に影響を与える要因についても、有意に説明変数となりうる独立変数は見られなかった。

実験 2 では、実験 1 の問題点を踏まえ、時間的意思決定における予定を「待ち合わせ」と設定し、その相手を単数他者（1 人）、複数他者（5 人）の 2 条件に設定した。また、待ち合わせに間に合う可能性を含むシナリオ 1 と間に合う可能性を含まないシナリオ 2 の 2 種類を設定し、2 × 2 の実験計画を用いた。調査対象者は実験者の SNS を通じて募集し、18～29 歳の計 192 名のデータを分析に用いた。単数他者、複数他者条件別にリスク志向・リスク回避の選択率を検討したところ有意な差は生じなかったが、シナリオ 2 よりもシナリオ 1 において、リスク志向の選択比率が高い有意傾向が示された。また、実験 2 で新たに用いた、「遅れに対する態度尺度」のうち、「自分の遅れに対する罪悪感」の得点が高い回答者、待ち合わせの重要度を高く感じている回答者ほどリスク志向の選択肢を選んでいることが示された。

本論文の目的は、先行する時間の遅れを経験した際に、次なる意思決定に影響を与える要因を検討することであった。実験 1 で設定した仮説 1「重要度の高い予定が書かれたシナリオでは、重要度の低い予定書かれたシナリオよりもリスク志向の選択肢を選びやすい」、仮説 2「リスク志向の選択肢を選んだ回答者は衝動性得点が高い」の 2 つの仮説はいずれも不支持であり、時間的意思決定における予定の重要度はリスク志向性に有意な影響を与えないということが示された。実験 2 で設定した仮説 1「複数他者との待ち合わせは単数他者との待ち合わせよりもリスク志向の選択肢を選びやすい」は不支持であったが、仮説 2「間に合う可能性がある場合は、間に合う可能性がない場合よりもリスク志向の選択肢を選びやすい」は一部支持され、ブレーク・イーブン効果の発現が確認された。本論文の課題点としては、シナリオ実験法を用いたことによる、現実とシナリオ内での意思決定の乖離が考えられる。本論文の展望として、交通道路上や産業場面、消費者行動における時間の遅れが、意思決定にどのような影響を与えるのかということを議論すべきである。また、遅れを経験した際の人間の心理特性を研究することで、交通道路上や産業場面における安全性に貢献できるか、ということを検討する余地がある。（安全行動学）